

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第 卷十五第

月四年五十和昭

## 論叢

乘數の問題……………文學博士 高田保馬  
支那の永小作制度……………經濟學博士 八木芳之助

## 時論

物價對策……………法學博士 神戸正雄  
戰時物價對策の再出發……………經濟學博士 谷口吉彥

## 研究

江戸時代の經濟政策……………經濟學士 堀江保藏  
期間分析と均衡概念……………經濟學士 青山秀夫  
マックス・ウェバーと十九世紀の方法的意識……………經濟學士 出口勇藏

## 說苑

一九三九年の銀需給……………經濟學士 徳永清行  
東西經濟思想の相似性……………經濟學士 穂積文雄

## 附錄

彙報  
外國雜誌論題

# 東西經濟思想の相似性

穂積文雄

## 一 はしがき

論語に、『我不欲人之加諸我也。吾亦欲無加諸人。』とあるを讀むことができれば、バイブルに、『人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。』とあるのを見出すことができる。

『西に、正義を踏んで恐れず、學理の爲には身首處を異にするを辭せざりし』「パピニアヌス」あり、東に筆を燕王成祖の前に抛つて、「死せば即ち死せんのみ、詔や草すべからず」と絶叫したる明朝の碩儒方孝孺がある。』

所詮、人である以上、その思ふところ、爲すところが東西洋を異しながらもたがひに一致するところあるのに不思議はあるまい。しからば經濟思想に於ても必ずや、東西揆を一にするものがないはずはないであら

東西經濟思想の相似性

う。  
そこでしばらく東西經濟思想の相似ると思はれるものを拾ふてみる。

## 二 荀子とトマス・ホッブス

荀子は人がもと群に於て存立することを認めて、「水火有氣而無生。草木有生而無知。禽獸有知而無義。人有氣有生有知亦且有義。故最爲天下貴也。力不若牛。走不若馬。而牛馬爲用何也。曰人能羣彼不能羣也。人何以能羣。曰分。分何以能行。曰以義。故義以分則和。和則一。一則多力。多力則彊。彊則勝。」と言ふ。これはまた人をしてクロボトキンの相互扶助論を聯想せしむるに足るものがあるが、しかし、荀子は人も知る性惡論者で、人を目して、『人之性惡。其善者僞也。』と視、從て例へば『人之性。生而有好利焉。順是。故爭奪生而辭讓亡焉。』と爲し、人は欲望の奴隸であり、欲望より脱却するを得ぬと爲して、例へば、『人之情。食欲有芻豢。衣欲有文繡。行欲有輿馬。又欲夫餘財蓄積

第五十卷 五二九 第四號 一二七

1) 論語、公冶長第五。  
2) 新約聖書、マタイ傳福音書、第七章、第十二節。  
3) 穂積文雄、陳重博士、法窓夜話、頁四。  
4) 荀子、第五卷、王制篇第九。  
5) 同上書、第十七卷、性惡篇第二十三。  
6) 同上書、同篇上。

之富也。然而窮年累世不知足。是人之情也。」<sup>7)</sup>と言ふ。だから荀子によれば人を自然のままに放任すれば欲望を縦にして社會は混亂に陥ることになる。即言ふ。人生而有欲。欲而不得則不能無求。求而無度量分界則不能不爭。爭則亂。亂則窮。<sup>8)</sup>かくてはせつかくの群も崩解せねばならぬ。しからはこれを救ふの道は如何。荀子はそれを『道欲』に求めて言ふ。『欲不待可得。而求者從所可。欲不待可得。所受乎天也。求者從所可。受乎心也。……故欲過之而動不及心止之也。心之所可中理則欲雖多奚傷於治。欲不及而動過之心使之也。心之所可失理則欲雖寡奚止於亂。故治亂在於心之所可。亡於情之所欲。』

しからは道欲の道は如何と云へば、荀子はそれを禮法に求める。即言ふ、『禮起於何也。曰人生而有欲。欲而不得則不能無求。求而無度量分界則不能不爭。爭則亂。亂則窮。先王惡其亂也。故制禮義以分之。以養人之欲。給人之求。使欲必不窮乎物。物必不屈於欲。兩者相持而長。是禮之所起也。』<sup>9)</sup>しかしながら、『禮は

賞罰を加へて之を強行し得て始めて價值あるものとなるのであつて、制裁なき禮はさらに禮の用を爲さぬ。<sup>11)</sup>」故に、『現在制裁を加ふる權力を握つてゐる君主の禮に従はざるべから』<sup>12)</sup>ざることになり、そこで、『孟子が「先王之道」を絶叫して革命を是認するに對し、荀子は「後王之道」を唱道して尊王の思想を鼓吹<sup>13)</sup>」することに。曰く、『後王者天下之君也。舍後王而道上古。譬之是猶舍己之君而事人之君也。』<sup>14)</sup>かくて君主の禮法に絶對力を認めて『有治人無治法』<sup>15)</sup>と言ふに至る。けれど、この語たるや、例へばかの“King can do no wrong”の如く、『法は君主の作るものにして、君主は法を無視するも差支なしといふ意にも解せらるる。』<sup>16)</sup>をもつて君權の絶對性を強調するものと爲すをうるからである。

これを要するに、荀子によれば、人は群に於て存立するが、しかし人の性はもと惡であるから、これを自然に放任すればおの／＼その欲望を追求して、相争ひつゝに群を破滅に導くことになる。それでこれを救済

7) 同上書、第二卷、榮辱篇第四。  
 8) 同上書、第十三卷、禮論篇第十九。  
 9) 同上書、第十六卷、正名篇第二十二。  
 10) 同上書、第十三卷、禮論篇第十九。  
 11) 小島祐馬博士、支那社會經濟思想、頁二八(東洋思潮、Ⅲ東洋思潮の展開、I)。  
 12) 小島祐馬博士、同上書、頁二七。  
 13) 小島祐馬博士、同上書、頁二七。

するために禮法が起るのであるが、禮法は權力を伴はねば效力が無い。それで君主が權力を以て禮法を行ふことになるのであり、そしてこの權力は絶対不可侵でなければならぬと云ふわけである。

論じてここに至るとき私は「トマス・ホッブス」の論

議を想起せざるを得ぬ。けれどホッブスによれば、

『人間は自然に其の根本的欲求に従ひて行動して他を顧みざる者なるが故に其の原始の状態は……萬人を敵とする (Bellum omnium contra omnis) 状態なり。』

されど斯く萬人が萬人を敵とする状態に於いては吾人は少しも安寧なる生活を營むこと能はず……是に於いてか人類は其の根本性なる利己心によりて遂に安寧の必要なることを發見せり。然るに安寧を保たむには互に自然に有する絶対の自由を制限して他を害せざることを約せざる可からず、而して件の約束を實行して全體の結合を保たむには全體の上に立ち絶対の權力を有して破約者を罰する主權者なかる可からず。……主權は全體の上に絶対の權力を有する者にして臣民は皆

絶対の服従を義務とせざる可からず。』<sup>17)</sup>

二者の論旨の相似ることまさに符節を合はすがごとくであるのに讃嘆せざるを得ぬ者私のみであらうか。

### 三 マルサスと韓非子

マルサスの人口論は次の如く要約せられる。『食物は人の生存に必要である』(……food is necessary to the existence of man) 又『兩性間の情欲は必要にして淫靡の現状を維持すべし』(……the passion between the sexes is necessary, and will remain nearly in its present state.)<sup>15)</sup> として『この二法則はわれわれが凡そ人類に就いての智識を有せし以來、われわれの天性に關する確法なるもの如し。』(These two laws ever since we have had any knowledge of mankind, appear to have been fixed laws of our nature)<sup>16)</sup> しかるに『人口の増殖は土地が生活資料を生産するよりも遙かに強大である。人口は若し妨げらるることなくんば幾何級數を以て増加すれども生活資料は算術級數を以て増加するに止まる。』(……the power of

15) 同上書、第八卷、君道篇第十二。

14) 荀子、第三卷、非相篇第五。

16) 小島祐馬博士、上掲書、頁二八

17) 大西祝博士、西洋哲學史 下卷、頁四十五—四十六、(改刷版)。

18) An Essay on the Principle of Population, as it affects the Future Improvement of Society. With Remarks on the Speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet,

population is indefinitely greater than the power in the earth to produce subsistence for man

Population, when unchecked, increases in a geometrical ratio. Subsistence only increases in an arithmetical ratio.)<sup>18)</sup>

かるに『人間の生活は必ず食物が入用にて、このことはわれわれの天性に關する法則なるが故に、これら二つの異なる結果は、常に平等に保たれなければなら

ぬ。』(By that law of our nature which makes food necessary to the life of man, the effects of these two unequal powers must be kept equal.)<sup>22)</sup>そして『これは人口に對する強烈

且つ不斷に作用する妨害を意味する。』(This implies a strong and constantly operating check on population……)<sup>23)</sup>そ

こに現はれるもの即『貧窮と罪惡』(misery and vice)<sup>24)</sup>で『前者即貧窮は絶對的必然的結果であり、罪惡は

可能的結果である。』(The former, misery, is an absolutely necessary consequence of it. Vice is a highly probable consequence……)<sup>25)</sup>

しかし、これでは人の世は闇に面するほかない。そ

れでマルサスは人口と食料の増加率相異の調節者として貧窮、罪惡の外に更に『道德的抑制』(moral restraint)<sup>26)</sup>をもつてくることによりて社會の前途に一縷の光明を投ぜむとする。

しかしながら『道德的抑制』とは結婚を抑制し而も不正なる情欲の満足を伴はざるもの (the restraint from marriage which is not followed by irregular gratifications)<sup>27)</sup>換

言すれば『われわれが家族を養ひ得るまで結婚を抑制し、而もその間完全に道德的行動を守ること』(the abstaining from marriage till we are in a condition to support a family, with a perfectly moral conduct during that period.)<sup>28)</sup>

の謂であつてそれは先に掲げたるわれわれの天性に關する確法の變更を意味する點に於て論理の矛盾撞着に陥りはせぬかと云ふ懸念がある。またマルサスの人口論は貧窮を人爲制度の所産として、その根絶を外部制度の變革に求むるマドウキンの熱烈火の如き理想論を排撃するに貧乏の原因を自然法則に歸する冷酷水の如き現實論を以てせるものと云はれるが、しかし、それ

and Other Writers, London: Printed for J. Johnson, in St. Paul's Church-Yard, 1798, p. 11.

19) *ibid.*, p. 11.

20) *ibid.* p. 11.

21) *ibid.*, p. 13-14.

22) *ibid.*, p. 14.

23) *ibid.*, p. 14.

24)

*ibid.*, p. 15.

25) *ibid.*, p. 15.

26)

T. R. Mathus, An Essay on the Principle of Population, (Ward and Lock

人類全體の貧乏の説明としてはうなづけるが、飽食煖衣の人のある反面にある糊口の資に窮する者を指す言葉の普通の意味に於ける貧乏の説明としては不十分であると云はねばならぬのではないかと疑問も起る。

しかしながら、かくの如きは一般經濟學史の取り扱ふ領域に屬する。私がこゝにマルサスの人口論を引く所以は、支那に於てしかも先秦時代に既にこれと同巧異曲と目しうるものがあるので彼此對照してその相似性を示さんがために外ならぬ。しからばそれはいかなるものかと云へば、それは即韓非子の人口に關する論議である。

韓非子は始め人口稀少なるときは財は餘りありて世は泰平であるが、やがて人口増大すると財貨不足を告げ、從て人は争ひ世は亂れるとして次の言を爲す。曰く、

『古者丈夫不耕。草木之實足食也。婦人不織。禽獸之皮足衣也。不事力而養足。人民少而財有餘。故

東西經濟思想の相似性

民不爭。是以厚賞不行。重罰不用。而民自治。今人有五子。不爲多。子又有五子。大父未死而有二十五孫。是以人民衆而貨財寡。事力勞而供養薄。故民爭。雖倍賞累罰而不免於亂。<sup>29)</sup>』  
論旨全くマルサスのそれを彷彿せしむるに足るが、ことにその人口増加率を幾何級數的に表現せる點に至りて相似一にここに至るかの讚嘆を禁じ得ざるものがあるではないか。

#### 四 司馬遷とスミス

司馬遷は、私の見るところによれば、經濟現象をよく理解せる人の一人である。彼は人間の欲望を肯定して『耳目欲極聲色之好。口欲窮芻豢之味。身安逸樂。而心誇矜勢能之榮。使俗之漸民久矣。雖戶說以眇論。終不能化。故善者因之。其次利道之。其次教誨之。其次整齊之。最下者與之爭。』<sup>30)</sup>と言ふ。從て欲望を充足する具たる財貨を重視して、『謠俗被服飲食。奉生送死之具也。』<sup>31)</sup>と言ふ。然らば財貨は如何に生産せられるか

Co.'s ed.) p. 9.

27) Malthus, *ibid.*, p. 9.

28) Malthus, *ibid.*, p. 456.

29) 韓非子、卷第十九、五蠹篇第四十九。

30) 司馬遷、史記、一百二十九、貨殖列傳第六十九。

31) 司馬遷、同上書。

と云へば、『人各任其能。竭其力。以得所欲。』<sup>32)</sup>と言ひ、又『待農而食之。虞而出之。工而成之。商而通之。』<sup>33)</sup>或は又『農不出則乏其食。工不出則乏其事。商不出則三寶絶。虞不出則財匱少。財匱少而山澤不辟矣。此四者民所衣食之原也。』<sup>34)</sup>と言ふ。これによりてこれをみれば彼が所謂分業を識認せる者なることは明である。しかるに生産は消費のために行はれ、消費は生産によりて可能であり、そして分業は生産の主體と消費の主體の分化を意味する。故に分業は當然にその集化、換言すれば分化したる生産の主體と消費の主體を財貨の獲得の上に於て連結することを前提し豫想せねばならぬ。そしてそれは交易によりて可能であると云へる。しからばそれら分業乃至交易は如何にして成立するか。いま司馬遷のこの點に闕する見解を伺へば、彼曰く、『此寧有政教發徵期會哉。』<sup>35)</sup>と。又曰く、『物賤之徵貴。貴之徵賤。各勸其業。樂其事。若水之趨下。日夜無休時。不召而自來。不求而民出之。豈非道之所符而自然之驗邪。』<sup>36)</sup>即彼によれば人が分業を營み交易を行ふは決

してその利益を豫想して計畫的に行ふのでもなければ又何人かの指揮號令あるにより爲されるのでもなく、例へば、水の低きにつくが如く、ことは自然に出づるとせられる。

論じてここに至るとき、私はアダム・スミスが、それによつて經濟學父の榮譽を勝ち得たる不朽の名著『國富論』に於て、開卷先づ同じく分業を論じて、その重要性を指摘せる際に述べたる一句を想起せざるを得ぬ。曰く、「This division of labour, from which so many

advantages are derived, is not originally the effect of any human wisdom, which foresees and intends that general opulence to which it gives occasion. It is the necessary, though very slow and gradual, consequence of a certain propensity in human nature which has in view no such extensive utility; the propensity to truck, barter, and exchange one thing for another."<sup>37)</sup>

これによりてこれをみれば、スミスも亦、分業交易を以て人智に基づかずして自然に出づるとせるものであつて、二人のみるところまさに符節を合するが如き

32) 司馬遷、同上書。  
34) 司馬遷、同上書。  
36) 司馬遷、同上書。

37) Adam Smith, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, Cannan's ed., vol. 1, p. 15.

33) 司馬遷、同上書。  
35) 司馬遷、同上書。

を認めざるを得ぬ。しかしながら二人の考への相似はこれのみにとどまらぬ。

司馬遷は分業交易の成立を論じてそれは人爲に基かずして自然に出づるを説くが、しからば自然は如何に人を駆りて分業交易を行はしむるか。分業交易の成因を自然に歸する以上は必ずやこの點に關する説明なかるべからざる筈である。そしてスマスはこれが説明を人の利己心 (self-love) に求めてつぎの如く言ふ。

“Man has almost constant occasion for the help of his brethren, and it is in vain for him to expect it from their benevolence only. He will be more likely to prevail if he can interest their self-love in his favour, and show them that it is for their own advantage to do for him what he requires of them. Whoever offers to another a bargain of any kind, proposes to do this. Give me that which I want, and you shall have this which you want, is the meaning of every such offer; and it is in this manner that we obtain from one another the far greater part of those good offices which we stand in need of. It is not from the benevolence of the butcher, the brewer, or the baker, that we expect our dinner, but from their regard to their own interest. We

東西經濟思想の相似性

address ourselves, not to their humanity, but to their self-love, and never talk to them of our own necessities but of their advantages……”<sup>38)</sup>

知らず司馬遷はそれを如何に觀じ、如何に説明せんとするか。この點に就いて見るもわれわれは亦、東西の兩思想家が殆どその揆を一にするを見る。即、司馬遷も亦、それを富を求むる人の性情、利己心より説明して或は華麗無比の章句に托して、

『賢人深謀於廊廟。論議朝廷。守信死節。隱居巖穴之士。設爲名高者。安歸乎。歸於富厚也。是以廉吏久久更富。廉賈歸富。富者人之情性。所不學而俱欲者也。故壯士在軍。攻城先登。陷陣却敵。斬將奪旗。前蒙矢石。不避湯火之難者。爲重賞使也。其在閭巷少年。攻剽椎埋。劫人作姦。掘冢鑄幣。任俠并兼。借交報仇。篡逐幽隱。不避法禁。走死地如鶩。其實皆爲財用耳。今夫趙女鄭姬。設形容揆鳴琴。揄長袂。譚利屣。目挑心招。出不遠千里。不擇老少者。奔富厚也。游閑公子。飾冠劍連車騎。亦爲富貴容也。戈

38) Adam Smith, *ibid.* p. 16.



射漁獵。犯晨夜。冒霜雪。馳阡谷。不避猛獸之害。爲得味也。博戲馳逐。鬪雞走狗。作色相矜。必爭勝者。重失負也。醫方諸食技術之人。焦神極能。爲重糴也。吏士舞文弄法。刻章僞誓。不避刀鋸之誅者。沒於賂遺也。農工商賈畜長。固求富益貨也。此有知盡能索耳。終不餘力而讓財矣。……若至家貧親老。妻子軟弱。歲時無以祭祀。進醮飲食。被服不足以自通。如此不慙恥則無所比矣。是以無財作力。少有鬪智。既饒爭時。此其大經也。<sup>39)</sup>

と言ひ、又は簡明に『天下熙熙。皆爲利來。天下壤壤。皆爲利往。』<sup>40)</sup>とも言ふ。何ぞスミスと口吻を等しくすることの甚しきや。そして私は『趙女鄭姬』が『目挑心招』き『不擇老少者』は即『奔富厚也』と云ふ現象が現代でもある巷には見出され、又今日上海の、名物である所謂賽狗 (Dog race) に於て『走狗』せて『作色』してゐることを思ひてそぞろ感なきを得ぬものであるが、それはともかく、スミスは上述の利己心の是認よりやがて進んで、各人の利益は各人自らが最よくこれを知

るが故に各人をして利己心の満足を求めて私利を追求せしむるときは、『見えやる手』(invisible hand) はこれを導いて自らなる調和を生じ、社會の繁榮を招來するに至るべしと觀じて、高くレイセー、フェール、レイセー、パッセー (raise, fall, raise, pass) の旗を掲げ、汗涉政策を排撃して自由放任政策を強調することはあまりにも有名であるが、司馬遷も亦自由放任論者であることは例へば先に引ける諸句の行間に逆る語氣よりして容易に看取し得るところであるが、就中、各人の私欲を肯定して、『善者因之。其次利道之。其次教誨之。其次整齊之。最下者與之爭。』とせるに於て明白白、一點疑問の餘地を残さぬと言ふを憚らぬであらう。

39) 司馬遷、上掲書。  
40) 司馬遷、同上書